

“復刻特集” 市報松江投稿

【松江の皆さんこんにちわ】

(41編) H18~R4

近畿松江会が発足し、今年度で18年を迎えました。発足時に「市報松江」平成18年(2006年)12月号「松江の皆さんこんにちわ」に、初代会長長谷川吉雄氏が執筆されてから、令和4年(2022)1月号までの41編を一挙に復刻掲載し、あらためて当会の歴史に思いを馳せることができると、この特集を組みました。

なお、お顔写真は掲載当時のものです。中には天上の方となられた方もいらっしゃいますが、いつまでも見守っていただいているものと思います。

ご協力をいただいた松江市の「市報松江」ご担当には厚く御礼を申し上げます。

◇平成18年(2006年)12月号

はせがわ よしお
長谷川 吉雄



平成18年(2006年)1930年松江市灘町生まれ。1954年島大文理学卒、(株)松坂屋入社、名古屋・東京・大阪勤務、1990年定年退職、1991年同人誌「蒼海」同人、目下25号まで出版、今日に至る。

近畿松江会が発足しました。

平成18年10月22日日曜日、近畿松江会の創立発足式と懇親会を大阪梅田の新阪急ホテルで開催、松江市長はじめ各方面からご来賓に出席いただきました。

県大阪事務所の記録では近畿地区で51番目の会だそうです。県都松江市の会が一番新しい

(一番遅くできた)会ということです。発足のきっかけは地元松江市の平成大合併です。八束郡の7町村と松江市が合併し、新しい松江市が誕生したことです。

去年の3月31日、7町村はそれぞれ新松江市の町の一つとなり、役場は支所となったのですが、大阪在住で古里が新松江市になった人たちにはまだピンとこない様子でした。このころ、県人会会長の交代があり、宍道町出身の和田亮介氏が新会長に就任されました。

その後、新会長と松江出身の友人たちが談笑中、松江市出身者の会がないことが話題になり、地元の市が大きくなったのだから、この機会に松江会を作ろうとの話がまとまりました。

発起人10名で100名の会員を集めることにし、発会式の日取りと市長ご出席の確認を得て会場も決め、口伝て人伝で会場を満杯にする目途が立ったのが9月も半ばでした。この間、発起人が最も気遣ったのがどの支所管内からも出身者を探し、入会出席してもらうことでした。

この会は新松江市を共通の古里とすることになった人たちが親睦を深め、そこから古里振興のお手伝いもできるようにしたいという願いを持っています。

古里の再編から近畿松江会が誕生しましたので、今後も市と話し合っ活動をはじめます。

なお、発会式当日、同じテーブルで顔を合わせ、実家は僅か50mの距離だという紳士と淑女が40年振りの再会を果たした感動の一シーンもありましたことをお伝えします。

◇平成20年(2008年)5月号

あらがね しょうじ
荒銀 昌治



旧制松江中学、高等商船学校卒業、昭和27年商船三井入社、昭和45年船長昇進、昭和58年阪神港水先人(パイロット)就業、平成14~18年日本パ

イロット協会会長、平成 18 年 11 月旭日中綬章、兵庫県西宮市在住。

昭和 55 年 10 月、ペルシャ湾航路のコンテナ一船の船長であった私は、湾口のホルムズ海峡が近づくとつれ異常に緊張が高まっていた。

前月日本を出港した後、イラン・イラク戦争が勃発し、この海峡がイラン海軍艇の銃撃で乗組員に死傷者が出たり、船ごと軍港へ連行されるなど危険な状態になっていたからである。

やがて、船が海峡に差し掛かるとすぐイラン軍の偵察機が超低空で飛来し、続いて武装高速艇が白波をたてて近づき船の右舷至近距離を併走し始めた。

私は、すぐマストに日の丸の国旗を掲げるなど、船内警戒態勢をとると同時に船橋からの監視を続けた。

ところが、この高速艇は何の信号も発信せず、ただ沈黙の状態ですべて併走するだけで誠に不気味な緊張が続いた。

私は、ふと 10 月が出雲では神在月で八百万神がお集まりになっていることが頭に浮かび、出雲人である自分が拝めばご利益があるかもしれないと、船橋にある神棚に深々と頭を垂れ祈った。

すると、驚いたことに、アラーの神にも通じたのか、高速艇は急に反転し何事もなかったかのように走り去って行った。

この体験を私はその後しばしば話題にし、神々の国出雲・松江を誇らしく自慢し紹介することになっている。

平成 15 年、東京勤務をしていた私は、東京松江会の縁で「松江観光大使」になった。そのことを業界紙に寄稿したところ多くの人々から反響があり、観光大使の名刺を追加注文したほどであった。また、今後多数退職する団塊世代も歴史・文化・伝統に興味を持つ人々が多い。

自然環境にも恵まれた松江である。昨年からはスタートした開府四〇〇年祭を契機として観光客一千万人構想が実現するよう願ってやみません。

◇平成 20 年（2008 年）9 月号

みつだ じんいち
光田 仁一



昭和 6 年宍道町来待生まれ、島根大学教育学部 26 年卒第 1 期生、大阪教育大学夜間部 38 年卒、宍道小勤務 4 年、大阪小勤務 36 年、大阪市教委、指導主事・小学校長歴任

後退職、大谷女子大学専任・非常勤講師 15 年、近畿宍道会副会長、敬老会会長、奈良市在住。

松江市では昨年「松江城開府 400 年祭」がスタートし、数々のイベントが開催され、また「大森銀山」が世界遺産となり、更に NHK 朝ドラ「だんだん」が放映される等、明るいニュースを聞くにつれ、古里の発展を嬉しく思っております。

さて、宍道町出身で近畿在住者による近畿宍道会として発足以来本年は 30 回の節目を迎えることになりました。

平成の大合併で松江市になるまでは、古里宍道町のご支援ご協力による年 1 回の総会には 100 名以上の参加者がありました。

総会では、宍道町が発展する様子のビデオ放映があり、また安来節・出雲弁保存会や神楽同好会等々の昔懐かしい公演で楽しみ、帰途には「しじみ」のお土産があり、更に農協出展の古里の名産品を大阪に居ながら購入できる等、古里が大阪にやって来た感がありました。

近畿在住者にとっては、古里との交流の場として大変喜ばれていました。

最近、高速道路が次々と開通し、日帰りも可能となり「古里は遠きにあつて想うもの」的な感が薄らぎ、加えて松江市となってからは、町の協力が途絶えまして、昨今では「古里を想う会」近畿在住者の「絆の会」を目指して、古里の話や会員相互の近況報告等や団欒・タレントの公演・くじ引き・カラオケ等で、会員相互の楽しみ場として喜ばれています。

今後とも会員の皆様に喜ばれる会の開催を目指しておりますが会員の方々や、お世話いただく幹事の方々も年々高齢化して参りました。会発展のため若い方々のご入会を役員一同願っております。

古里の方々から近畿在住の若い方に入会をお勧め下さいますようお願い申し上げます。

(注) 近畿宍道会は、その後、近畿松江会と統合しました。

◇平成21年(2009年)1月号

いとう まさよし
伊藤 雅義



1931年、来待村(現宍道町)生まれ。松江中・松江高、鳥取大(農)を卒業後、農林省に入省。中国四国農政局農政部長を経て関連企業・団体に転出。ふるさとプラザ大阪館長等を務める。現在、近畿松江会副会長。

ふるさとを離れて五十有余年、この間、東京・名古屋・岡山等を転々とし、今は京都に住んでいます。本籍地は今でも宍道町のままです。帰郷の頻度は歳とともに減りましたが、かといって望郷の念が薄らいだわけではなく、此方で近畿松江会等に入会し、同郷の方々とふるさとを語り、親睦を深めています。皆さんの郷土を想う気持ちは格別で年配の方のなかには、テレビに映る全国の天気図を見て、真っ先に目に留まるのは、今の居住地ではなく松江だという人さえいます。ふるさとへの想い入れは並大抵のものではありません。この心情を何とかふるさとの発展に生かせないものかなと思います。

現役時代、都市と農村の交流による地域活性化の業務を担当していたこともあって「銀河系いわて大使」を努めたことがあります。数年前からは「島根県遣島使」と「松江観光大使」

を拜命しています。島根県とりわけ松江市の良さ、素晴らしさを大いに宣伝し、観光発展等にお役に立ちたいと思っています。

松江市でも定住施策の推進に取り組んでおられますが、むかし、葛飾北斎が六十幾つになって長野の山の中にある庄屋の家に移り住み、江戸の版元からの発注を受け、浮世絵を描き、それを飛脚に持たせて届けていたそうです。

交通網や情報網が高度化した今日、地方都市や中山間地域に移住し、創作活動等に取り組む人達は今後益々増加すると思われます。また、地方と都会の双方に拠点を設け、地方で暮らしながら、時には都会の文化やセンスにも触れるといういわば二住生活を楽しむ家族も増えるだろうと言われています。そのような場合の移住先、あるいは二住生活の一方の拠点として、古き良き日本の景観や文化が色濃く残る松江は最高の適地だと思いますが如何でしょうか。

ふるさと松江の益々のご発展を遥かに祈って止みません。

◇平成21年(2009年)5月号

かりた うんきぶろう
蒔田 運三郎



昭和6年島根県大東町生まれ。旧制松江中学(現松江北高)卒業。昭和25年松江郵便局(現松江中央郵便局)に入局。昭和60年8月大阪中央郵便局を退職し、自営業に従事。本年1月から近畿松江会会長に就任。(明石市在住)

近畿松江会は4年目を迎え、会員も150名足らず、会の基礎固めに役員一同励んでいます。

私は会をまとめる立場として、各市町村人会に招かれることが多いですが、結束力が強く発展する会に共通する、あることに気がきました。それは歌です。その歌も著名な「故郷」が最後に必ず歌われていることです。♪ 兎追いしかの

山♪の歌詞を知らない人はまずないでしょう。大合唱する時、会の心は一つになっています。歌は心を開く力、一つに結束させる力を持っており、松江を詠った会歌を作って、総会で歌おうと役員会で提案されました。松江市の会歌という以上、夫々の市町村を読み込むのがなかなか大変なことでしたが、役員会で互いが知恵を絞りようやく次の四番までが出来ました。

- | | | |
|----|----------|-------|
| 一、 | 神話は語る | 佐陀加賀 |
| | ご縁嬉し | 八重垣 |
| | 熊野神魂も | 鎮座して |
| | だんだん松江 | ふるさと |
| 二、 | 千鳥お城 | 石垣 |
| | 嫁が島に | 茜さす |
| | 松江大橋 | カラコロと |
| | だんだん松江 | ふるさと |
| 三、 | 蜆美味し | 宍道湖 |
| | 波に遊ぶ | 夕鴨 |
| | 勾玉湯の町 | 浴衣がけ |
| | だんだん松江 | ふるさと |
| 四、 | 牡丹薫る | 八束路 |
| | 紫烟けむる | 中海 |
| | 恵比寿ショコホイ | 五本松 |
| | だんだん松江 | ふるさと |

もっとも一つ一つの市町村名が読み込まれてはいませんが松江市を取り巻く中海や宍道湖や大橋川、そして神話や歴史や自然が、私達の故郷を何らかの形で表象しています。曲は勿論かの「故郷」のメロディーです。ところでさきのNHK連続ドラマ「だんだん」の放映が私達のこれからを後押ししてくれるでしょう。

今月のホーランエンヤ見物の前日、市庁舎における第四回近畿松江会総会で「ふるさと松江」を大合唱し、皆で盛大に楽しみたいと思います。

◇平成21年(2009年)9月号

やまもと よう
山本 洋



大正10年島根県玉湯町生まれ。松江中学卒業後慶應義塾大学に入学。学徒出陣により約2年間軍役に服したあと復学。卒業後大和紡績(株)に入社。平成7年総務部長を以て退職。

私が玉湯町の生家を離れて既に七十余年たちました。去る5月に開催された松江城山稲荷神社式年神幸祭を拝観のため松江を訪れましたが、市ご当局のお取り計らいにより申し分のない好位置に観覧席を与えられ、地域ごとに工夫を凝らした絢爛たる船渡御の情景に手が痺れる程の喝采を捧げつつ見とれました。

何分にも大阪天満の天神祭、安芸宮島の管絃祭と並ぶわが国三大船神事の一つと称されるだけあって、かくも華麗な祭礼を私はかつて見たことがありません。市長様、商工会議所会長様をはじめ、行事の企画・実行の任に当たられた関係各位に対して心からの敬意を表するものであります。この祭礼が12年に1度の開催である以上、私の年齢からして次回の神幸祭を拝観することはできないわけですから、大橋川を下ってゆく船列を拝しつつ感慨無量の想いを禁じ得ませんでした。

さて、我々の生地は山陰・裏日本と呼ばれており、瀬戸内に面する広島・岡山地域が山陽・表日本と称されるのに比して些か差別的呼称と思われます。しかし今から約1300年の昔、「出雲風土記」が編纂され、万葉の著名な歌人・柿本人麻呂が石見国の国司として在任した事実を思うにつけても、奈良朝・平安朝時代に於ける松江地域と中央政府との関係は瀬戸内地域とは比すべくもない密接なものでありました。そうした事情を思うと、我々の生地が瀬戸内地域に比してやや格下の呼称に甘んじてい

るのは不満な思いを禁じ得ません。

それはともかくとして、松江市在住のみなさま方におかれましては、この地の持つ優れた文化遺産を次世代に語りつぐべく今後とも努力を続けられることを期待してやみません。

◇平成22年（2010年）1月号

ありた たかし
有田 嵩



昭和8年宍道町生まれ、松江工高電気通信科、立命館大学法学部卒業。大阪市役所就職、東京事務所長、港湾局管理部長、理事歴任後退職。大阪港振興(株)代表取締役。後に港湾

関連の団体役員・会社顧問。大阪市在住。

松江、宍道湖という言葉、写真がテレビ、新聞に出ると直感的に反応し直視する。そしてその付近の状況を種々と思い、関連する人々の様子はいかがかと思う。故郷は常に深く脳裏にあります。近畿松江会は、帰松して総会を開催しホーランエンヤを見物しました。

大阪天神祭に参加したことのある私は、この祭りに強い関心を持っていました。水上の祭事は難しいものです。祭神と全体の隊列、川幅いっぱいのお餅を描きながら祭事を行うなど親しみやすく、見物者も祭りに参加しているような感じになり、素晴らしい郷土の祭見物であったと思います。

合併前の宍道町出身者等で集まる近畿宍道会は昭和29年に始まり、今年で31回の会を重ねました。食糧難の時代で参加人数分のコメを用意しなければ、パーティー会場は確保できませんでした。また、集団就職世代であり就職した若人を励ます大きな目的がありました。集まる話が町に伝わり、町長、故・木幡吹月氏も参加激励していただきました。その後会員の積極的参加、歴代町長のご協力を得て、時代に合う

話題、催物を行ってきました。今後とも会員と壮・青年層の入会・活動により一層にぎわうよう期待し努力しようと思います。

大阪ではいま静かなブームなるものがあります。●水陸両用観光バス（普通のバスのように陸を走り、そのまま大川の水の中を走る）●大阪市立東洋陶磁美術館（東洋陶磁の至芸「安宅コレクション」を収蔵、展示）●国立文楽劇場（美しく着飾った小さな人形が人間と同じような身動きをし、モノまで言っています）。

水都松江・水辺の文化は人の心をなごませ豊かにしてくれます。多くの人々、団体に周知し、観光客が増えるよう努力したいと思います。

◇平成22年（2010年）6月号

きむら やえこ
木村 八重子



東本町出身。母衣小学校、島大附属中学校、松江高校、フェリス女学院短大卒。木村工機(株)顧問。近畿松江会副会長。大阪府八尾市在住。

18の年まで、ゆったりした松江の地でのんびり過ごしていたものですから、初めて親もとを離れて横浜の短大に入った時は、故郷が、家族が恋しくて休みになると八雲号に飛び乗って一目散に松江に向かったものです。

21歳で結婚して大阪に住むことになったのですが、子どもの小さいころは地域活動に参加。手がかからなくなると、ちょうどカルチャーセンターが誕生し始めたころで、学生時代に勉強嫌いだった反動もあったのでしょう、珍しくて楽しくて午前には講義、午後はダンス、夕方に講義をもう一つと…、いつの間にか忙しくしていると落ち着かない生活になっていました。

主人の会社では、製品カタログなどの印刷物や広告を担当し、別にハンドバックや靴の輸入販売も10年間やりました。

浅く広くで、キャリアにはつながりませんが、その時の状況に沿った、貴重な経験をたくさんさせていただいてきました。

そんな時代が過ぎ、気がつくとは今は松高同期会、近畿双松会、近畿松江会と、故郷を通してのお付き合いの輪が再び広がり、先輩方の松江への熱い思いに、私の忘れていた何かが強烈的な刺激を受けております。

皆さんのように何の貢献もしていませんが、京セラの稲盛和夫氏が辻説法と托鉢に松江の地を選ばれたのに、私のふるさと自慢が少しお心に残っていたのでは…、というのは私の思い上がりかもしれませんね。稲盛氏は私も所属する城陽CCの社長もなさっている関係で、松江の案内と実家での会食をと、ずっとお誘いしていたのですが、今は「時のひと」になられて、願いは遠のいてしまいました。

申し遅れましたが、「松江くらぶ」「八雲庵」は実家にあたり、皆さまには大変お引き立ていただきありがとうございます。

私も今年、古希を迎えましたが、あと10年ぐらいは元気で動ける、と思っていますので、少しでもご恩返しができれば、と願っております。皆さまよろしく願いいたします。

◇平成22年(2010年)9月号

ながい あきら
永井 彰



昭和6年米子市生まれ。4年後松江に転入。朝日小・松中・新制松高・京大医卒。35年、紫香楽病院に赴任、外科・呼吸器科医長歴任、平成9年に定年退職し現在も非常勤医

として勤務。大津市坂本に在住。

美しい松江を偲んで

松江を離れて、もう50年以上になりますが、大橋から眺めた宍道湖の風景は、まだしっかりと覚えています。

5歳の秋、米子から新雑賀に転居し、学生時代は松江でお世話になりました。肺結核で2年間も休学しましたので大学では結核医を志し、卒後「陶器の町信楽」の結核療養所に赴任。肺結核の手術に専念して定年までの37年間勤務し、現在も非常勤医として毎週2日、比叡山麓の坂本から名神・新名神高速を走って、信楽に出掛け外来や訪問診療などを担当しています。

以前、大津日赤の内科部長を勤めた友人が定年後、隠岐の診療所に行くことになった際、「本来ならば私が行かねばならぬが、私の分まで頑張ってくれ」と頼んだことを思い出します。お世話になった郷土のために、これまで何もしていませんでしたが、先般来「ふるさと松江、だんだん基金」に、毎月ほんの気持ちだけのものを送っています。

夕映えが美しい宍道湖とは違って、琵琶湖岸からは夕日は全く眺められませんが、明け方に鈴鹿山系より昇る朝日の光が、湖面に反射する風景はとても見事です。湖東には「近江富士」と呼ばれる三上山が美しく浮かび上がります。

通勤の途上、湖岸を走りながら、はるかに続く比良の山並みや広大な湖面を見渡していると、いつとはなしに、宍道湖の風景と重なって来ます。

こころざしを 果たして
いつの日にか 帰らん
山は青き ふるさと
水は清き ふるさと

と口ずさんでいるといつも涙が滲んできます。
松江の皆さん！ どうぞ お元気で！

◇平成23年(2011年)1月号



まつい めぐみ
松井 恵

神戸市生まれ。平成11年～19年松江市南田町に居住。現在京都市在住だが今も変わらぬ松江ファン。

松江の、人・食・酒をこよなく愛す。花王CM

K(株)勤務。松江観光大使を拝命しています。

新年明けましておめでとうございます。

ご無沙汰しておりますが、お世話になった皆さま方はお元気でしょうか。新年と言えば、一度だけ拝したことがある松江城から臨む初日の出を思い出します。あいにく雲が重く垂れ込めていましたが、日が昇り始めるとその雲間から光芒が広がり、輝きを増す光の中で織りなす彩りのさまは、まさに神々からの祝福を受け守られてきた地の証明であると脳裏に焼き付いた一シーンでした。

松江を離れ、早四年近くになります。今思うに、松江という町はそれ自体で完結している町ではないでしょうか。豊饒なる自然、恵まれた山海からの食材、また、私が暮らしていた近隣には四つもの蔵元があり、人が集う場にいつも大いなる愉悅をもたらしてくれたものでした。

そして何といても人の心です。松江には私の大切な友人がいます。その人から最初に諭されたのは「損して“徳”取れ」という言葉で、前に出るばかりでなく一步引くことの意味深さでした。損をする様でいてその実、人を照らしてあげる寛容さがすなわち自身の徳になるのだと。松江の人々には生き方における強さとしなやかさが備わっていると思います。加えて、以前にもこの欄で「水」の話が記されていましたが、視覚の中に常に水がある情景は、そこに暮らす人々の心の潤いにも繋がっているように思えます。

数年後、再びその潤い溢れる町に戻り、心豊

かに暮らしたいと切望している私ですが、囿らずも独身のままですので、どなたかお心当たりの方がいらしたらぜひご一報の程よろしくお願ひします。

最後に、本年が松江に縁するすべての皆さまにとって幸多き一年でありますよう、心からお祈り申し上げます。

◇平成23年(2011年)5月号

おしだ よしき
押田 良樹



雑賀小・松江四中・松江高校(11期)卒業。神戸大学卒業後、大和銀行・関連会社勤務。平成15年定年退職。現在近畿双松会(松江中学・松江高校・松江北高校の近畿地区同窓会)会長。大阪府吹田市在住。

小学4年生になる年の春、父の転勤で宇都宮から未知の地松江に移り住みました。北関東は風土も人情も乾いた印象の地でしたが、松江は随分違う土地柄だなと子ども心に感じました。

小・中・高各3年の計9年間を、当時はまだ人家もまばらな上乃木の丘陵地に建てられた官舎で過ごしました。上乃木三叉路へのデコボコ道が通学路でした。何年前だったか帰省の折懐かしくなり訪ねてみました。昔の官舎はもうなくなっており、裏にあった宇賀池は埋め立てられて姿を消し、西側の「シャーウッドの森」と名付けて遊び場に使っていた林もすべて住宅地に変貌していました。

何よりも驚いたのはあの「悪路」が道幅も広くなり「けやき通り」と名付けられた美しい並木通りになっていたことです。街並みは時の経過とともにこれほどまでに変わるものかと驚くとともに、少年時代を過ごした街の大変身をうれしく思いました。

「松江も変わった」という話題が出る時、私はまずこの上乃木界限のことを思い浮かべま

す。当時の官舎の子ども仲間は今も松江、京都、札幌などで同窓会を開き、昔を懐かしんでいます。

父は松江が気に入って定年前に大庭の地に終いの棲み家を建てました。今は母が父の遺した椿を守って暮らしています。年に数回帰省しますが、松江の街全体が昔に比べて随分明るくなったように感じます。

生活したのは9年間だったので松江には未体験の場所が数多くあります。昨年10月高校の卒業50年の同窓会の翌日、遠くから参加した旧友3人と鑿行列を見物した後、白潟公園で眺めた宍道湖の夕日は形容できぬほどの美しさでした。4人とも一時間近く何かに打たれたように無言で眺めていました。心が洗われるようでした。まだまだありそうな松江再発見を楽しみにしております。

◇平成23年(2011年)9月号

こわた たいぞう
木幡 泰三



1942年生まれ。松江商業高等学校卒業。日本ゴム(株)、(株)アサヒコーポレーション勤務。(株)ネクサスサービス取締役、近畿宍道会事務局長、松江商業振商会近畿支部事務局長を歴任。

島根県遣島使及び松江観光大使。

一章「進駐軍と祖母」

昭和22年、私が5歳のころ、住んでいた宍道から、祖母に連れられて松江の親戚の家に向かう途中の「松江駅」での出来事が強烈な印象として残っています。

当時、宍道の一般家庭では井戸水をツルベで水をくみ、各家庭でバケツや水ガメに移し替えてヒシヤクなどを使うのが一般的でした。子ども心に「宍道は田舎だなあ」と感じていました。

ところが、松江では水は水道、火力はガスを使っており、都会という印象でした。

そんな都会の松江駅の改札口を出て構内を歩いていると、目の前に数人の進駐軍がいて棒状のチョコレートを食べていました。

もちろんチョコとはどんな物か知るはずもありません。それをじっと見ていると、超大柄の進駐軍の一人が食べかけのチョコを私にくれました。

それを見た祖母は慌ててチョコを奪い、「チョコッと待ちなさい」と言って駅の片隅に私を連れて行き、歯形部分を自分の歯で切り捨てて、残った部分を私にくれました。私はそれをむさぼるように食べていたと聞いています。

第二次世界大戦に敗れ、まだ人々の心の傷が癒えないころの出来事です。祖母の心の傷もまた深く、反射的にあのような行動をとったのではないのでしょうか。

二章「祖母に教わったこと」

私は幼い時から祖母にいろいろなことを教えてもらいました。

家から百メートル先が宍道湖で、雨の日以外はほとんどが魚釣り。フナ、コイ、ボラ、セイゴなど釣った魚を三枚に下ろすことや、ハゼなど小魚の佃煮の作り方も祖母から教わりました。

これらは教員だった父親の晩酌のさかなとなり、5月ごろにはタケノコ掘りも一緒に行ったものです。

このように、いろいろなことを先人から受け継いできたことが、「今昔の感」の昨今です。インターネットの時代にわれわれが孫に教えることはあまりなくなってきたように思われなりません。孫と娘の会話の”番人”になって見たいと思うこのごろです。

◇平成24年(2012年)1月号

おがわ たつお
小川 龍朗



島根町加賀生まれ。
母衣小・隠岐海士小・
加賀尋常高等小。
近畿松江会・近畿島
根県人会・京都島根
県人会。
総本山石鎚山法恩寺。
(京都市在住)

「若し、密かに行かば、神現れて、飄風(つむじかぜ)起り、行く船は必ず覆える」と出雲風土記が伝える加賀の潜戸。出雲第二の社、佐太神社の祭神佐太大神生誕の地也、とあります。

この加賀の中央を流れる清流澄水川のほとりで産声を上げました。幼くして両親を亡くした少年の描いた大志は“大陸浪人”。ときまさに戦時の真っ最中。そこで練った作戦が、満蒙少年義勇隊へ入って旧満州(中国東北部)へ国費目当ての無銭渡航。この策まんまと成功して中国大陸へ。このとき弱冠15歳。

しかし、思惑狂って2年後、ソ連(ロシア)軍の参戦進攻で約300人の同士の3分の1が憤死。あえなく大陸浪人の夢破れ、命からがら日本に引き揚げました。

数奇の運命をたどった少年も、今は八十路の好々爺。「故郷は遠きにありて思うもの・・・」などとうそぶきながらも、最近をよく帰松しています。昨夏も高校二年、中学二年の孫2人を連れて里の澄水川に行き、キャベツのアオムシを餌に小ブナならぬハエ釣り。弟にはよくきたものの兄はさっぱりでふくれっ面。夜にはガンチャ(カニ)籠を仕掛け、翌朝籠を揚げると、期待していなかったので驚きました。親指?に髭をたくわえた甲羅8センチぐらいのモズクガニがなんと10数匹。子どもたちは大歓声を上げ、爺さまは大満悦。このところ孫たちに「旅行に行こう」と言えば、うれしいことに「島根・松江」とご指名です。

ところで、今年はいみじくも古事記編纂1300年。私たちの仲間、近畿島根県人会が「古事記の旅」(1泊2日)を企画しています。旅程は松江を含めた出雲地区中心。私たちの誇る故郷再発見の旅には松江の方のご参加もお誘いします。詳細は、下欄にある近畿松江会事務局まで。

皆さま、お元気で…。

◇平成24年(2012年)5月号

さかもと たかお
坂本 隆男



1939年誕生の72歳。大津市在住。乃木小、松江三中、松江高校を経て名古屋工業大学を卒業。日本電気硝子(株)に入社し、後に専務取締役を歴任した。

ハーンと私の松江

私が松江に住んだのは、小学校として5校目となる乃木小に転入した6年生の時から、松江高校卒業までの期間である。わが家は親父の職業によるいわゆる転勤族であった。松江では人生の最も多感な少年時代を過ごしたことになる。友人や恩師、近所や親戚の方々など温和で親切な人々に囲まれて、豊かな自然の中で育てられた思い出いっぱいの街である。本籍は京都府なのだが、今では「松江はわが故郷」と言ってはばからない。

ラフカディオ・ハーンは1年3ヵ月という短い松江滞在であったが、世界で最も美しく素晴らしい街として松江を高く評価している。何がハーンにそう言わせたのであろうか。その理由は確かに風景などの自然は豊かで美しいが、彼の著作に表されているように、そこに暮らす素晴らしい人々であり、彼らが編みだした生活様式や民話・神話によるものであると私は確信している。

人生の一時期を松江で過ごし、この土地を素

晴らしいと感じているハーンと私との共通点。それは彼が世界を渡り歩いてきて、私が戦後の混乱の残る東京に住んだ後で、松江で目にした素朴で親切であって礼儀正しく伝統を大切に
する人々とその営みである。その背景には今なお脈々とした歴史と伝統が流れている。

今でも百歳を超える義母の住む松江。私共夫婦は時々彼女のお見舞いに車のハンドルを松江に向けて駆けている。彼女を取り巻く松江の人々に、私を育ててくれた故郷松江の人々に感謝の念でいっぱいである。(文中敬称略)

◇平成24年(2012年)9月号

いのうえ りゅうきち
井上 隆吉



昭和11年松江市上東川津町生まれ。川津小、松江一中、松江工業高校卒業。日本建設(株)入社、常務取締役、監査役、日興エンジニアリング(株)社長。近畿松江会常任幹事、大阪西ライオンズクラブ所属。

私は嵩山の麓の上東川津町で生まれました。小学校のころは嵩山の山でウサギや小鳥を追い、朝酌川や支流の保田川で魚釣りをして遊びました。今でも月1回前後のペースで松江に帰っていますが、国道川津バイパスから上東川津町に入ってきますと子供のころを懐かしく思い出します。先日も喜寿を迎えて川津小学校の同窓会があり、旧友たちと思い出話をして、楽しく時間を過ごしました。

小学校の高学年から高校卒業まで畑や田んぼの農作業の手伝いをしました。松江工業高校入学後は上東川津から古志原の学校まで自転車で通学しましたが、今日のように道路が整備されていませんでした。上東川津から旧国道の持田に出て島大前を通りましたが、この間は舗装道路ではなく地道でした。相生町を過ぎた所から床几山入口まで坂道を登るのに大変体力

を使ったことが忘れられません。

高校卒業後、大阪に出て、縁あって日本建設(株)に入社。名古屋、大阪、広島、福岡各支店に勤務し、平成22年に退職しました。52年間の在職中、大阪万博で大変忙しかったこと、オイルショック、バブル景気やその崩壊などを経験しましたが、故郷松江で鍛えた体力と気力で乗り切ることができました。

退職後は在職中に交流のあった異業種交流会のメンバーとの交流やライオンズクラブの活動、近畿松江会の活動、趣味としての魚釣り、ゴルフなどは楽しくやっています。

6月17日には、自宅(高槻市)近隣の方2人と鹿島町の朝洋丸(朝倉船長)で島根半島沖に釣りに行きました。キンメダイをはじめとして、たくさん釣れ、同行の2人は大変喜んでくれました。島根半島沖は好釣り場とあらためて認識しました。

◇平成25年(2013年)1月号

いとう まさはる
伊藤 征治



昭和13年、松江市北堀町(後丁)生まれ。北堀小学校、松江一中、昭和32年に県立松江商業高校卒業後、住友銀行(現三井住友銀行)入行。現在、振商會近畿支部顧問・石切劔箭神社諮問委員(奈良市在住)

新年明けましておめでとうございます。

社会人の第一歩を大阪からスタートして以来、今年で55回目の新年を当地で迎えたことになります。私の生家は城山に囲まれた千鳥城、堀川沿いの松並木、ハーン旧居、武家屋敷などが位置する塩見縄手に近い北堀町で、小学校、中学、高校はいずれも自宅から5、600メートルの圏内でした。

「ふるさとは遠きにありて思うもの・・・」

と言いますが、故郷松江は、春は城山の桜・桜餅、夏は宍道湖の袖師ヶ浦で水泳・シジミ採り、秋は宍道湖や大橋川でのゴズ（ハゼ）釣り、冬は護国神社前の坂道でお手製の竹スキー・ソリ遊びなど、四季折々の素晴らしい自然環境に育まれました。

また、出雲時間と言われる、ゆったりとした時の流れに加え、親戚をはじめ近所の人たちの温かく穏やかな、そして決して出しゃばらない、謙譲の美德の人情の厚い風習が、極めて多感な時期、人格形成に大きな影響を受けた地であり、誇りを持って松江出身と言えることに感謝しております。

高校卒業以降、当地で会う同郷の人は松商の同窓生関係以外はほとんどありませんでしたが、平成15年から5年間、振商会（松江商業高校同窓会＝1903年設立）近畿支部長を務めた関係で「近畿島根県人会」に加入。その後平成18年に発足した「近畿松江会」の常任幹事を受けてからは、両会の定例会等で松江高校・松江工業高校をはじめ他校ご出身の皆さまと素晴らしい故郷を共有していることに感謝をしながら、故郷を語り理解を深めさせていただいています。

「近畿松江会」への加入と同時に「松江観光大使」の大役を受け、趣味の詩吟の会はじめもろもろの寄り合いの場で微力ながら故郷のPRに努めております。最後になりましたが、「松江」のますますのご発展をご祈念申し上げます。

◇平成25年（2013年）5月号

きむら けいきち
木村 恵吉



松江市雑賀町生まれ。雑賀小、松江四中、松江商業高校卒業、(株)イトキン入社。10年後アパレル会社設立、その後不動産会社設立。現在近畿

島根経済倶楽部、近畿松江会常任幹事、新大阪LC、吹田ジャズ実行委員長。大阪府吹田市在住。

昨年、「美肌GP」で最も美肌を持つ県として島根県が全国1位となり、今年は厚生労働省が発表した平均寿命で女性は2位となりました。ゆったりとした生活、近所の助け合い、豊かな自然、そのほか多くの要因があるでしょうが、素晴らしい故郷だと誇りに思っています。

私は県都・松江市雑賀町で生まれました。家は国道9号沿いにあり、みなが高下駄を履いて大きな音を響かせながら四中に登校したのが懐かしく思い出されます。当時、冬は測候所の坂で手作りのソリで遊び、春には近くの池や田んぼで魚捕り、夏は宍道湖で泳ぎやシジミ採り、秋はクリ拾いなど恵まれた自然環境の中で伸び伸びと成長しました。

父が市内で繊維問屋を営んでいましたので松江商業に進学し、クラブ活動はバドミントン部に所属。先輩後輩の関係はもちろん団体生活を経験し、昭和35年大阪の繊維会社に就職したのが現在の第1歩でした。

70人の入社が1年後には10数人までに減る大変厳しい状況でしたが、山陰人の粘りと我慢強さ、団体生活経験があり頑張れたと思います。

万博（昭和45年）の年にアパレル会社を設立し、現在は不動産会社を運営しています。今日まで近畿島根経済倶楽部をはじめ近畿松江会、大阪新大阪ロータリークラブなどで活動しています。

5年前から青少年育成事業として関西ジャズ協会と共催で、吹田メシアターで吹田ジャズコンサートを開催。毎回1500人もの観衆を迎え、東日本大震災後は義捐金チャリティーも兼ねる大会の実行委員長として活動しています。

松江観光大使を拝命してからは名刺交換の際、話も弾みますので個人と大使の名刺を一緒にお渡しし、ふるさとのPRに努めています。

最後になりましたが、松江のますますの発展を祈念申し上げます。

◇平成25年（2013年）9月号

たけだ さだお
武田 貞雄



昭和14年、雑賀町生まれ、雑賀小学校、松江四中、松江商業高校、関西大学大学院卒業修士取得、三井物産関連会社入社、現在、自動車協会専務理事、厚生労働省年金委員、企業診断士、行政書士補、松江観光大使。河内長野市在住。

私は、昭和14年雑賀町に生まれました。故郷の松江を離れてから、私の大阪の生活は松江での18年をはるかに超えて55年になりました。その間よき学友、恩師、同僚、よき家族に恵まれ、3年前には古希も終え、元気で大過なく、いまだ現役で自動車協会の専務理事として勤務、陸運行政、交通行政に携わっています。

松江での18年間は、人生の中で最も多感な時期を過ごしました。子どものころの思い出は、夏には当時宍道湖の水もきれいな遠浅の袖師ヶ浦で泳ぎ、時には嫁ヶ島に歩いて渡ったり、潜ってシジミ、テナガエビなどを採り、その夜の食卓に乗った懐かしい思い出があります。

松江での18年間は、人生の中で最も多感な時期を過ごしました。子どものころの思い出は、夏には当時宍道湖の水もきれいな遠浅の袖師ヶ浦で泳ぎ、時には嫁ヶ島に歩いて渡ったり、潜ってシジミ、テナガエビなどを採り、その夜の食卓に乗った懐かしい思い出があります。

低学年のころはまだ戦後の余韻も残り、物資不足は生活の中にさまざまな影響を残していました。今の子どもの遊びと違い、遊び道具などなく、雑賀町の狭い道路でペッタン、ビー玉の三角だし、五寸くぎを地面に刺しての陣地取りなど素朴な遊びでした。野球といえば、少年雑誌の付録の型紙で布製のグローブを作り、手作りの竹製のバットで三角ベースの野球をしたのを思い出します。

現在松江も少子化の影響からか、街の中では外で遊んでいる子どもの姿が見えず、いささか寂しい気持ちがします。ちなみに昭和20年ごろの雑賀小学校の生徒は約1500人もいましたが、平成23年には約230人と減少し、今昔の違いに感慨ひとしおです。

年齢を重ねるごとに故郷が懐かしく、年に1、2回は帰松をしています。松江市の定住人口も今では約20万人を超え、特例市として新たなスタートを切り、観光・産業共に順調な発展がうかがわれます。これからも山陰最大の中核都市としてますますの発展と、老若男女、誰もが住みよい魅力と活力ある街を目指して欲しいと思っています。私も観光大使の大役を受けており微力ながら松江の観光PRに努めています。

◇平成26年（2014年）1月号

たけたに すずむ
竹谷 奨



昭和28年生。八束小・中学校・松江高専を経て建設コンサルタント入社。昭和54年設計事務所開設。平成20年より近畿松江会事務局長、25年度から同幹事長兼任

新年明けましておめでとうございます。

私が大阪へ旅立った昭和48年当時、大根島周辺は中海の干拓事業推進で大きく変わろうとした時代でした。干拓事業は結局、産業政策の見直しにより打ち切りとなりましたが、干拓により中海、宍道湖が淡水化し、シジミほか汽水水域生物の完全消滅を免れたことは幸いといえるのではないのでしょうか。

また、干拓事業で建設された堤防道路などは、江島大橋が開通するとともに県道として形を変えており、松江市街から八束町を経て境港を結ぶ地域の重要な道路として変身できたことを見れば、決して負の遺産ではなかったのだと思います。

干拓事業着手後、中海の環境変化により魚介類などが姿を消した時代から数十年、正月にはなくてはならなかった「赤貝」が地元の漁協の皆さんの努力により甦よみがえりつつあるとのこと。うれしい限りです。

さて近畿松江会は、平成 18 年 12 月号で亡初代会長長谷川吉雄氏に「近畿で島根県市町村人会の 51 番目に創立しました」としてこの欄へご登場していただきました。それから八年、荊田運三郎氏、伊藤征治氏と引き継がれ現在に至っています。

当会は松江市出身者の親睦を深めるとともに、「松江市の応援団」として毎年、松江市長に出席いただいて、総会・懇親会を開催しています。懇親会のアトラクションには市内のいろいろな団体に出演していただいています。ホーランエンヤを機に隔年で「ふるさと訪問」と称し松江市で総会を開催しています。また、事業の一つとして会員の厚意をもって市内の児童養護施設へささやかな支援を一昨年より始めました。

結びに松江市民、出身市外在住の皆様が良き年でありますよう、お祈り申し上げます

◇平成 26 年 (2014 年) 5 月号

たけうち いちろう
竹内 一郎

1931 (昭和 6) 年、(現)雲南市加茂町生まれ
1949 年、(株)報光社 (松江勤務)
1958 年、大阪市北区 (株)報光社印刷 取締役
営業部長
1993~2010 年、啓光印刷 (株) 代表取締役社長

松江を離れて大阪で 56 年。走り抜いた日々を思います。

昭和 19 年西津田の親戚で 1 年、以後数年は西部汽車通学生として、就職後はビジネスの主戦場として、多感な青春時代を多くの経験や機会と共に、松江の人情や風土に育てられた人間形成の原点でした。15 年間の松江時代は愛する故郷の原風景です。

旧制松中同期の畏友 (いゆう)、和田亮介さんの名著に「文化と匂い」という松江についての一文があります。品格ある名文には、深い共感と感銘を受けました。松江は宍道湖と共にあって松江らしさがあり、しっとりとした静と美

の国際文化観光都市をよく表しています。

昭和 28 年ごろ、友人のヨットに同乗して宍道湖の中ほどまで出たことがありました。湖岸から見るのと全く違う全方位のロケーションは、エキゾチックな感覚で興奮しました。湖の南北は青い山脈、山紫水明そのものです。今思えば、その時ヨーロッパの景勝地の風景を連想しました。そこで松江市内の地上風景をもし絵にすれば、極上の水墨の名画として見ます。

それでは水上はいかがでしょう。宍道湖、大橋川、中海は、モネ以後、セザンヌなどの印象派の風景画を連想させます。ただ、絵としては少し彩りが加わればと思います。これは実現不要の夢のまた夢ですが、もしも湖の中ほどに嫁ヶ島 3 個分くらいの小島があつて、全島紅葉林であつたなら憧れの絶景ポイントにならないだろうか、大橋川下流の中洲が紅葉の名所であつたらどんなであろうかなど妄想します。不遜な放言、誠に恐縮至極お許しください。愛するオンリーワン松江こそ観光で輝く無限の可能性を秘めた景観の宝庫です。

県市民業の一致した真心のおもてなしに深い敬意と感謝をささげ、ますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

◇平成 27 年 (2015 年) 1 月号

まつもと こうじ
松本 耕司



1947 年 1 月、上本庄町川部生まれ、本庄小・中・松江北高・大阪市立大学法卒。松下電器産業退職、近畿双松会会長、近畿松江会常任幹事

明けましておめでとうございます。

私が通った本庄小・中学校の校歌には錦の海と言われる中海、北にそびえる枕木山、海をへだてた大山が何度となく謳われていますが、そんな自然の景観にあふれた枕木山の麓で私は

育ちました。

初めて松江を意識したのは小学三年の松江市との合併の時、私の集落でも旗行列をして祝ったことを覚えています。子ども心にもそんなに松江っていいところかなと思ったのですが、そのとおり松江はいいところでした。お城も、街並みも、おだやかな城下町の人々も、宍道湖も、天神祭も、映画館も、まさしく松江は「ハレ」の場で、郡部から来た少年の目を大きく見開かせてくれました。

やがて高校生になり、松江は私の日常の世界になりましたが、高校陸上部での経験が私の人生の基礎をつくってくれたように思います。マネージャーでしたが全国大会にも連れてってもらい、初めて日本の国全体を意識した時でもありました。

大学、社会人、現在と大阪を中心に過ごしてきましたが、何かと不調の時も松江に帰れば元気を取り戻していたように思います。私のメンタルヘルスの最大の装置は松江なのかもしれません。

そんな松江や母校に対する感謝の思いから、私は近畿での高校同窓会や松江会の一員として松江を応援する活動に参加させていただいています。中でも近畿松江会は今年で発足 10 年を迎えますが、更に多くの皆さまのご参加を願っていますので、近畿のお知り合いの皆さまにぜひお声掛けをいただければ幸いです。

昨年に引き続き、今年もまた、ふるさと松江と皆さまにとって、良いことがたくさんありますよう心から願っています。

◇平成 27 年 (2015 年) 5 月号

うちべ しげる
内部 茂



1965 年 2 月生まれ、乃木小から朝日小、松江三中、松江高専、1985 年に大阪へ、その後、不動産業に携り、2000 年に独立、(有) エクスパート

ナーズ代表取締役、近畿松江会副事務局長

大阪へ出てきて、もう 30 年。独立して 15 年、いろいろな方々とのご縁のおかげで、今に至っていますが、いまだに大阪弁をうまく使えません。アクセントが違うようで、ズーザー弁もよく出てしまいます。

高校生のころからでしょうか、松江 (田舎) から出たい願望が強くなり、二十歳の時に大阪に出ました。若気のいたりでしょうか。

そんな思いで松江を出ましたが、できるだけお盆中心に年一回は帰省しています。1992 年に米子道が全線開通して、とても早く便利になりました。若いころバイクや友人らと車に同乗し、国道 181 号で四十曲トンネル越え、山道の渋滞で落合に出る時間の掛かったこと、休憩に寄っていた喫茶店のこと、懐かしく思い出します。

今、調べてみたら、米子道は 22 本もトンネルがあるんですね。子どもたちが小さいころの帰省 (島根半島のきれいな海での海水浴付きの家族旅行ですが・・・) では、「カニ」「トビウオ (アゴ) だあ！」とたくさんの入口のレリーフで盛り上がりました (高校生・大学生となった今は反応がありませんが・・・)。

40 歳を過ぎたころからですが、近畿島根県人会や近畿松江会に参加するようになりました。松江出身のふるさとを思う諸先輩方のお付き合いは、心が和む大切な時間になっています。

最近、松江や島根県がテレビなどでよく出てきて、うれしく思ってます (錦織圭君の活躍、出雲大社式年遷宮、直近では某 CM のスマネですか)。

微力ではありますが、こちらで、少しでも、松江の良いところ、島根県の魅力をピーアールできればと思っています。

◇平成27年(2015年)9月号

つるは こうこ
鶴羽 孝子



1952年、松江市西持田町生まれ(旧姓石橋)。松江北高、山口女子短大を経て、1973年、日本電電公社(現NTT西日本)入社、2005年に退職。Web制作会社代表を務め2012年に退く。

兵庫県在住、近畿松江会常任幹事。

関西に根を下ろして四十余年、後ろを振り返ることなく、無我夢中で過ごしてきました。

娘たちが巣立ち、仕事も一段落して、少し心の余裕ができた六年前のことでした。実家の氏神である持田神社に伝わる「亀尾神能」継承の活動をしていた父から、近々大阪で能舞を披露することになったので見に来ないか、との連絡がありました。その時、初めて「近畿松江会」という会の存在を知りました。当日父に会い、能舞を見たいという思いで会場へ出向いたところ、席を用意していただき、宴に加わる流れに。これを契機に「近畿松江会」の会員となりましたが、そこには関西に居ながら故郷松江に居るような懐かしさと安堵感がありました。

松江会の行事に参加するうち、昨年役員を仰せつかり、同時に、おこがましくも「松江観光大使」というお役目もいただくこととなりました。これも来阪の翌年に亡くなった父が導いたご縁と思い、微力ながらお役に立てるよう努めているところです。

また、母校松江北高の同窓会である「近畿双松会」にも参加するようになり、そこで出会った同期生とともに、還暦を機に「関西在住同期の会」を立ち上げました。そこに集う同期生は、在学中は知らなかった人がほとんどですが、同じ松江の高校で同じ学年だったというただ一点でつながりあい、親しみがわき、楽しい集まりを開いています。

松江で暮らした年月より、関西で暮らした年月の方がはるかに長くなり、この地に骨を埋めることになりますが、“関西のオバチャン”になりきれないのは、松江人の奥ゆかしい気質を残しているからでしょうか。

◇平成28年(2016年)1月号

わたなべ さとる
渡辺 悟



1950(昭和25)年、北田町生まれ。附小、附中、松江北高を経て早稲田大学第一文学部卒。毎日新聞社(経済部、論説室など)を退職して現在、株式会社高速オフセットに勤務。

近畿松江会常任幹事。近畿双松会副会長。

高校を卒業して転居を重ね、大阪に来たのは32年前。母が亡くなって10年余がたち、実家はもぬけの空ですが、故郷は疎遠になるどころか年々身近な存在になっています。

大きな理由は、近畿松江会や近畿双松会(松江中・高・北高同窓組織)で、さまざまな方々の新着帰省情報をシャワーのように浴びているからです。松江でご活躍の皆さんから直接お話をうかがう貴重な機会も事欠きません。

最近のトピックスは昨年5月の近畿松江会創立10周年記念総会で、文豪小泉八雲のひ孫、小泉凡・島根県立大学短期大学部教授の講演をお聴きする機会を得たことでした。「凡(ぼん)」というお名前は連合軍最高司令官マッカーサーの副官で、昭和天皇の戦争責任について「不起訴」の意見書を出したボナー・フェラーズに由来しています。

知ってはいたのですが、5年前ニューヨークの古書店から入手した書簡類でフェラーズがいかに深く八雲と小泉家を敬愛していたかを詳細に知ることができました。

世界中で進む八雲再評価の事例を聴きなが

ら浮かんだのが、京都市がつくったキャッチフレーズ「日本に、京都があってよかった」の松江バージョン、「松江に、八雲が住んでくれてよかった」。つくづくそう思います。

11月の近畿双松会総会では「松江城の国宝指定」について清水伸夫・松江市教育長からお話をうかがいました。大阪の地でアンテナを張って故郷の情報に注目しています。松江の皆さんにそのことを知っていただきたくて書いた次第です。

◇平成28年（2016年）5月号

もい りちこ
茂居 理智子



堅町生まれ 雑賀小、四中、松徳女学院卒。山陰南京玉すだれ代表。安全光触媒の砂トキサンド シルテック代表。島根遣島使および松江観光大使。堺市在住。

「それぞれ!!松江良いとこ玉すだれ」一。堅町で生まれ育ち、高校を卒業後、結婚。当時の堅町は商店の宝石のようににぎやかでした。夫の転勤で大阪に移り住んで30余年。大阪で南京玉すだれの魅力にはまり、プロの資格を取りました。

両親の介護で帰省が増えるのをきっかけに、松江市で山陰中央新報文化教室(南京玉すだれ)を開きました。松江城開府400年祭では、全国から80人の南京玉すだれ応援隊と一緒に堅町(天神さん)からのパレード。そのリーダーとして先導を胸を張って務めさせていただきました。年末の余芸大会、福祉祭り、まちおこし…今でも頑張っており、県内各地から通ってくださった生徒さんたちとの交流も続いています。

両親亡き後も帰省の機会は多く、いつも故郷へ近づくほどに思いは募ります。人との繋がり、生活環境がコンパクトに整い、今では住みたい

まち1位。先日、散歩の途中で出会った宍道湖の夕映え。思わずシャッターを切りました。松江城が国宝になり観光地として更に人気も高まっていますが、一期一会の感動を与えるだけでなく、恵まれた自然の恵みの魅力に感謝です。

松江の味覚を楽しむのも帰省の目的。現在、市内に家があり、床几山から堅町を通り伊勢宮界限へ!!堅町中央あたりにお洒落な横文字の看板と、ほのかな灯り。誘われるまま美容室に入るとイケメン青年2人が、これ以上ない笑顔であいさつを交わしました。大阪のおばちゃんにはアメ玉とイケメンが大好きなのです。「松江良いとこ」自然と水に恵まれ、人が互いを慈しみ和む。「生活遺産」これからの松江に期待しています。

◇平成28年（2016年）9月号

たなか ゆうこ
田中 裕子



石橋町生まれ。北堀小、一中、松江女子高卒。財団法人鉄道弘済会関西支部、ダイエー吹田店。現在、寿電気工事(兼勤務)、近畿松江会常任幹事、松江女子高皆美が丘会関西支部長。吹田市在住。

「水の都の空晴れて 朝日輝く千鳥城」は、六年間歌っていた北堀小学校校歌の第一節ですが、その松江城が昨年国宝に指定されました。そのお城をテレビで見るたびにうれしく思います。子どものころ、町内の少し高台にある千手院が遊び場だった私は、そこから見える松江城と、城北小学校校区の街並みが一番好きです。朝ドラで映し出された時には、とても感動しました。

今年もNHKで再放送された桃の節句の「花もち」作りは、春休みの楽しい行事の一つでした。花もち作りに椿の葉は欠かせず、いつも千手院のお許しを得て同院の椿の葉をいただい

ていました。今年の春、女の子の孫が生まれたので、来年の初節句は子どものころを思い出して作ろうと、今から楽しみです。

そして縁雫（えにしづく）とは縁結びのまち松江に降る雨と言う意味ですが、松江女子高生のアイデアで、第一回観光甲子園の優秀作品賞を受賞しました。梅雨空を松江らしく表現した、すてきな言葉だと思います。

現在会社では、経理、総務などの仕事をしています。事務の仕事も、私の若いころは、書類は手書き、計算はそろばん、コピー機は日本人のサイズに合っていなかったのが、踏み台に乗って緊張しながらとっていました。現在はパソコン相手となりましたので、漢字が読めても手書きが苦手になりました。

松江から大阪へ出て来た当初は関西なまりの言葉に苦労しましたが、私が住んでいる北摂地域は通勤族の多い所なので言葉遣いには、あまり気を使わない日々を過ごしています。昨年からは近畿松江会に参加する機会をいただいています。関西在住の諸先輩方の活躍を大変頼もしく拝見しています。私と同年代の方ももっと参加される時間をつくられたら、また新しい楽しみが得られるのではと思います。

◇平成29年（2017年）5月号

こわた みつまさ
木幡 晃正



現在、兵庫県篠山市在住。島根遣島使・松江観光大使、近畿松江会・近畿宍道会の幹事

私は宍道駅前の木幡家に生まれ、松江北高卒業までは宍道・松江が生活圈。大学時は京都。

NTT へ就職後は大阪+兵庫が活動地域です。

「ふるさとは遠くにありて想うもの思い出の山、思い出の湖」

ふるさとの女性は穏やかで理知的。お茶事時

等のしぐさも美しいです。

また、遠く離れて暮らすと、如何に、ふるさとの自然景観が素晴らしいかが、身にしみて感じます。

(1)宍道小時の「思い出」

当時、父は明治生まれのイケメン国鉄（JR）マン・母は店主で大変多忙の環境。

私は、5人兄弟で兄姉と妹弟（今店主）のサンドイッチマン。

「夏のれんげ祭の湖上花火と夜店・おろち神楽」「美味しい氷水」「フナ・ゴズ釣り・蜆取り・螢狩り」

(2)松江の附属中学時…陸上部

「汽車+バス通と陸上部活動の多忙なる日々」「運動会3年連続学年優勝」

(3)松江北高校時…陸上部

「質実剛健の校風、文武両道の部」「暁の超特急吉岡隆徳氏の部訪問」

「芦田先輩（大東町）との約2年間の往復汽車通学と陸上部活動の懐かしき日々」

(4)大学時等

北海道周遊のテント旅。こづかい稼ぎで京都ホテル外人客室係英会話バイト等。友人達と各地の名所旧跡見学。琵琶湖でヨット・雪山スキー・氷上スケート等での体力強化。ベストセラーの購読・美術館・映画の観賞等。でも英語成績はオール優。（汽車通学時の先輩のマネのお蔭です）

★社会に出てからは、H4 実家全焼・H7 大震災体験等がありました。終わりに松江の皆様のご多幸を心からお祈り致します。

◇平成29年(2017年)9月号

しんじ ひろし
宍道 弘志



1961(昭和36)年松江市生まれ。内中原小、一中、北高、京都大・同大学院修了後、坂倉建築研究所に入社、現在は大阪事務所長。大阪府吹田市在住。

「珍しいお名前ですね」「実は島根県に宍道湖というのがありまして、その宍道という字です」「そちらの方のご出身で？」……

仕事で名刺を出すたびに、こんな話をしながら、ときに松江の紹介などもしてきました。松江とか島根県と聞いても、あまりイメージの湧かない方も多いのですが、意外なところに松江ファンがいて驚かされることもあります。

松江に住んでいたのは高校までで、大学を出て30年以上、大阪で建築設計の仕事をしてきました。設計の仕事には新築だけでなく、既存建物のリニューアルもあり、最近ではリニューアルが注目される機会が増えてきたように感じます。

私自身が担当したリニューアルの一つに、大阪市中央公会堂の保存・再生があります。赤煉瓦の中之島公会堂として有名な大正7年の建物で、保存か取り壊しかが長らく議論された末、平成14年にリニューアル工事が完成しました。工事前は老朽化が激しく、使い勝手の悪い部分もありましたが、リニューアルにより建物本来の輝きを取り戻しました。これまでに2回ほど近畿双松会(松江中・高・北高の同窓組織)の総会がここで開催され、歴史を感じさせる重厚な空間が大変好評でした。

小学校1年生のときに学校の近くに県立図書館ができて、よく通ったものです。その後、建築に関わるようになって、市内にはこの図書館をはじめとして、古いものから現代のものまで、名建築が数多くあることが分かりました。

帰省した際には、こうした建物を少しずつ見て回ることにしているのですが、現在も武家屋敷のリニューアルが行われるなど、建築が大切にされ、観光資源にもなっていることは、とても素晴らしいことだと思います。

◇平成30年(2018年)1月号

しのき ゆたか
篠木 豊



昭和15年生まれ
朝酌小学校卒業 松江第五中学校卒業(現松江第二中学校) 島根農科大学附属農林高等学校卒業(現松江農林高校) 現在、イゲタ(株)代表取締役

思えば松江を旅立ち大阪に就職してから60有余年の月日が経ちました。

西尾町の実家では今日まで200年来の4世代家族を継承しております。

上阪してからは多くの方々との出会いに恵まれ、長きにわたり商志を持って過ごしてきました。現在は50年程前に義父より引継いだ大阪天満宮へのご奉仕に精励させていただいています。

毎年7月24日・25日の日本三大祭(京都祇園祭、東京神田祭)である大阪天神祭においては、福梅講の講元として陸渡御の行列に参加し、日本三大船神事(広島厳島管弦祭、松江ホーランエンヤ)でもある船渡御の折にはホーランエンヤに思いをはせたりしています。またその他の祭事や全国の神社等への参拝行事のお世話もさせていただいています。

皆さま、夏に大阪へお越しの際にはぜひとも天神祭にご参加いただきたく思いますのでご一報ください。

今ごろは毎月のように趣味のゴルフなどで帰松しており、その度に宍道湖七珍(スモウアシコシ)を味わうことが非常に楽しみです。味に肥えた大阪の友人たちにも汽水湖ならではの

の多彩な食材が人気で、全国のどこにもない豊かな環境で育まれたおいしい郷土料理の数々は私の自慢でもあります。このように松江を旅したり、または故郷の旧友に大阪の魅力を伝えたりしながら素晴らしい交流を図ることは、私の使命のようにも感じております。

達成目前ともなりました国内ゴルフ場 100 選の制覇と、ゴルフ場設計の巨匠である故井上誠一氏設計のゴルフ場 38 ケ所の攻略を目標にしながら、これからも松江と大阪の行き交いは、成しうる限り存続して行きたいと思っております。

◇平成30年（2018年）5月号

うめき たかし
梅木 隆志



1946 (昭和 21) 年生まれ。下宇部尾小、美保関北中、松江北高、高崎経済大学経済学部卒、大同生命保険会社入社。主に IT 部門・営業部門に携わり、63 歳で退職。近畿双松会副会長。近畿松江会会員。松江観光大使。大阪市鶴見区在住。

故郷を離れて、半世紀。職業柄、転勤があり、大阪を皮切りに浜松・東京・宇都宮・横浜・広島と勤務し、また出張・旅行で日本全国の都道府県に行きましたが、独身時代から現在まで、毎年、お盆のころには墓参りに帰省しています。今後も元気である限り続けたいと考えています。

帰省の度に松江が変わっていくのをこの目で見てきました。くにびき大橋・宍道湖大橋・フォーゲルパーク・ティファニー庭園（現イングリッシュガーデン）・レイクライン・大根島の陸続き・松江歴史館・堀川遊覧・県立美術館・だんだん道路など、できた時に家族を連れていきました。

また、帰省時には「出雲そば」の美味しい店

を探し歩くのが楽しみです。去年は、鬼の舌震近くまで行きました。妻と子どもは大阪生まれですが、今では松江の大ファンです。

ところで、今住んでいる地域には 15 の町会があり、運動会・盆踊り・高齢者対象の「ふれあい喫茶」・防犯活動などを行っており、年一回は町会長・女性部長の 40 人ほどの慰安旅行があります。

数年前、町会長になった時、山陰地方を提案し、皆さんの賛同を得て、皆生温泉に泊まった後、ベタ踏み坂（江島大橋）を渡り、松江へ。

松江の滞在時間が限られており、地ビール館での昼食、堀川遊覧の乗船だけとなりましたが、帰りのバスの中の酒の肴に買った名物「あご野焼き」「赤貝の煮付」が大好評、松江は良いまちであったとのことで提案者として安堵しました。

今後も、友人・知人に声をかけ、微力ながら松江のために多くの観光客が訪れるよう PR に努めます。

◇平成30年（2018年）9月号

まつお としひろ
松尾 年浩



1943 年生まれ。竹矢小・中、松江四中、松江商高卒。グンゼ(株)入社出向、グンゼ開発(株)常務取締役 兼 (株)つかしんタウンクリエイティブ社長。

2006 年、退職。

振商会近畿支部長、松江観光大使、近畿松江会会員。

来年 5 月、日本三大船神事「ホーランエンヤ」が举行されますが、私は、その五大地最大の権伝馬船を擁する「いーまかた」の馬潟町に生を受け、高校卒業まで家業の農漁業を手伝い、ゴズ釣りなどに興じていました。

最大の思い出は、昭和 33 年の「ホーランエンヤ」に踊り子・剣権で参加したことです。当

時は松江城のお堀を櫓伝馬船で回り、京橋川を通り大橋川へ出ていきました。兩岸・橋上は人であふれんばかり、最終は城山稲荷神社での踊り子全員そろっての舞のご奉納、その時の感動は一生忘れません。

そして高3時、松商は選抜高校野球でベスト8に進出、応援リーダーの一員として憧れの甲子園へ。開幕試合は観衆約七万人の記憶があります。

入社後は、種々の業務を経て、商業デベロッパ事業への進出や温泉掘削・温浴事業に参入し、街の再開発に全力を注ぎました。その間、全国各地や海外を訪れましたが、郷土愛を自負する私にとって「心の豊かさ」がある松江に優ると思えるところはありませんでした。

退職後は、母校OB会などの世話役を引き受けていますが、西宮では阪神淡路大震災で震度七、今年高槻でも遭遇し、防災の重要性を痛感しています。

松江には、親族会や同窓会などで帰省し懇親を深めています。長年熱い情熱を注ぎ、ミスター「ホーランエンヤ」とまで言われていた父親代わりの兄を、今年亡くし悲しみの中ですが、何代にもわたる親族のゆるぎない恩愛の太い絆があり安心。これも松江の皆さまが育てていただいたものと感謝しています。

今でも毎朝は宍道湖産のシジミ汁、七珍の「シ」「ア」の激減は残念。楽しい生活には、松江の話が一番です。観光大使の一員として松江ファンをさらに増やしていきたいと思っています。



◇平成31年（2019年）1月号

ながせ たけし
永瀬 丈嗣



1975（昭和50）年、松江市玉湯町生まれ、玉湯小学校、玉湯中学校、松江南高等学校、大阪大学卒。現在、大阪大学超高压電子顕微鏡センター・大学院工学研究科。

私は現在、大阪に住んでいますが、生まれてから18年間、松江市玉湯町で育ちました。大阪で「あなたのご出身は？」と聞かれると、「松江です」と答えています。「松江です」の言葉に、「松江城が国宝になりましたね」や「宍道湖の夕日がきれいなところですね」と言われることが多いように思います。

「出身は松江です」と言っただけですが、小さいころからの慣れで「出身は八束郡玉湯町です」と言っただけになってしまう時が今でもあります。「八束郡」という言葉から離れられないのだと感じています。

一方で、自分の子どもたちは、「八束郡」といった言葉を全く使いません。息子に「お父さんの出身は、八束郡玉湯町だよ」と言ったら、「お父さん、間違っているよ」と訂正されてしまいました。「八束郡」という言葉がなくなっていくような気もして、少し寂しい気持ちになることもあります。

しかし、「松江市玉湯町」となったことで、「八束郡玉湯町」の時代にはなかった新しい人とのつながりが生まれたと実感しています。こちらには「近畿松江会」という故郷を同じくする同郷会組織がありますが、まさに「松江市玉湯町」となったことでのみ実現した、多くの素晴らしい同郷の方とお会いする機会を得ました。自分の子どもらの世代は「八束郡」という言葉を使うことはないですが、私とは違い小さいころから広域の松江市に関係した人たちの中で育っていくのだと思います。

まだまだ若輩者で、同郷の諸先輩方のみならず、後輩の皆さんにまで助けていただいているような身ではありますが、少しでも同郷の皆さまのお役に立つことができればと願っている次第です。

◇令和1年(2019年)5月号

かとう じゅんいち
加藤 巡一



島根大学附属小、一中、松高(松江北高卒)、島根大学文理学部物理学専攻卒、兵庫県立高校教諭、県教委事務局、県立高校教頭(神戸高校ほか)、県立高校長(芦屋高校ほか)、

神戸松蔭女子学院大学教授。瑞宝小授章受章

松江には年に4回くらい外中原の自宅に帰りますが、ラフカディオハーンの怪談を連想できる漆黒の夜と昼のトンビの鳴き声が好きです。

小学生のころは毎日、登校は徒歩で30分、下校は2時間ほどかけて友達と遊びながら帰りました。城山や宍道湖湖岸、堀川のすべてが遊び場でした。家に帰っても、雨でなければ近所の子もたちと暗くなるまで道路で体ごとぶっつけて走り回るようなゲームをしました。

私は小学校4年生のころ理科の教員になりたいと思っていました。大学を卒業して、生まれた神戸市灘区(本籍は松江市)に住みたいと思い、兵庫県の県立高校で物理と数学を教え始めました。県立芦屋高校の校長を60歳で定年退職して、運よく近くの大学で専任教授として教壇に立つことができました。

70歳でまた定年退職してからも、やっぱり理科を教えることから離れられず、大きな赤字を出しながら小学生の高学年を対象に理科実験教室(実験広場で検索可能)を開設しました。一人でも多くの子もたちにゲームやスマホなどより面白い現実があることを、五感を通し

て伝えたいと考えました。1年間で130種類以上の実験を体験してもらいますが、達成感を大切にしたいので少人数(6人)に分けて各グループ月3回行っています。最近は低学年対象のキッズサイエンスコース、先生方対象の理科クラブ、高齢者対象の科学工作なども月1回開いています。

ほかに灘区青少年育成協議会や灘区保護司会の会長などのボランティア活動もしています。好きなことばかりしてきた人生ですが、71歳の時に勲章を受章し、生き方が肯定されたように感じました。子どものころの松江での経験が生涯を通しての基礎になったと思い感謝しています。

◇令和1年(2019年)9月号

おおの とおる
大野 徹



昭和34年生まれ。竹矢小、四中、松江南高、広島大学工学部卒。森下仁丹(株)入社後、研究開発本部長などを経て、現在は業界団体役員をしながら、しまねものづくりアドバイザー。奈良市在住。

松江の皆さん、初めまして。早いもので私が松江を離れて、40年が過ぎようとしています。以前は年2回ほど家族を連れて帰っていましたが、現在は、毎月1回、母の様子を見に帰るくらいです。

高校まではのほほん気分で年中暮らしていたせいか、お恥ずかしながら、これはという思い出がありません。

しかし、本厄のときの武内神社での厄払いが転機となりました。

小学校時代の旧友と久しぶりに再会し、地元で頑張っている皆さんのキラキラ感に衝撃を受け、それを契機に、松江や島根のさまざまな魅力について調べたくなったことを鮮明に覚

えています。

一方で、森下仁丹(株)に入社後、約30年間、ものづくりに関わりました。その中で「新規健康素材」の探索というテーマもあり、国内外を歩き回っていた時期がありました。

そこでよくよく調査しますと、松江市を含む島根県は、なんと「百寿者率」と「美肌」で全国トップなんです。その秘密がきっと日常の食生活の中にあると、10数年前から、市内および県内の各地域に足を運び、地元の人からの話をお聞きし、いろいろな健康長寿につながる素材や生活習慣があるなあと少しずつわかってきました。

最近松江市に帰りますと、仕事柄(笑)、お店開拓が欠かせないのですが、素材はもちろん、店内で初めてお会いする人の親切さ、そして端々の松江弁に癒されています。「やっぱり、松江の良さはこれなんだ!」と感じる一時を満喫しています。

昨年、(公財)しまね産業振興財団の「しまねものづくりアドバイザー」に就任しました。県内の事業者の皆さんのものづくりのお手伝いをさせていただき、少しでもお役に立てればと思っています。

◇令和2年(2020年)1月号

ふくま のりひろ
福間 則博



1956年松江市生まれ、雑賀小学校入学、松江北高、大阪大学法学部卒業。弁護士法人福間法律事務所・代表弁護士
宝塚市在住。

松江に生まれ、高校を卒業し1年間の自宅浪人を経て関西へ出てから早44年になります。関西での生活が長くなり、関西に同化してきたと思っているのは自分だけで、今でもよく出身はどちらですかと尋ねられます。「島根県の松

江です」と言うと、決まって「いいところですね」と言われます。

私が大学に入った時には、松江と言うと愛媛県の松山と間違える人がいたのですが、今ではそんな人は皆無です。松江市の広報・周知が進んできたのは嬉しい限りです。

それにしても松江の人気は広がりを見せ、「松江はいいところですね」の次には、「宍道湖の夕日はきれいですよね」とか、「ぼてぼて茶をいただいてきました」といった松江訪問者ならではのコメントをいただきます。中には「松江を含む山陰には車で年1、2回行きます」というコアなファンもおられます。

また、つい最近、ある関西の人が私に「松江のご出身だったのですね。大変失礼しました」と言われるので、何のことかとお話を伺うと、先日、その人からいただいたお茶が松江の物で、松江出身者に松江の品を送ったのが大変失礼だったということでした。松江出身者のプライドをくすぐる出来事でした。

松江に帰る回数はめっきり少なくなりましたが、それでも松江は私の幼少期と多感な時期を過ごしたふるさとであり、誇りであり、心のよりどころです。浪人中の冬、大学受験を前にして通っていた島根県立図書館から見たお堀の雪は、寒風にさらされながら舞い上がり、その厳しくも美しい姿は、私の大切な思い出となり、当時の心象風景と重なっています。

松江はその文化と景観を大切に、人々に感動と安らぎを与えるまちであり続けてほしいと思います。

◇令和2年(2020年)5月号

ひらやま きょうこ
平山 恭子

津田小、松江四中、松江南高卒。島根県学校事務職員を経て結婚、以来大阪市在住。
通信機器販売・工事会社役員。

令和元年5月、370年続く日本三大船神事「ホーランエンヤ」を見学に近畿松江会の皆さんと

帰松しました。

出雲風土記にもある、阿太加夜神社（城山稲荷神社御神霊の船の神幸先）にて公式参拝で拝礼。神社の境内には木に巻きつけられた藁の籠と役目を終えた櫓伝馬船が安置されているのを見て歴史を感じつつ宿に向かいました。

翌日の「渡御漢祭」は御神船、供船、各地区の櫓伝馬船など百隻近い大船団です。

櫓伝馬船には、前髪かつらの勇壮な「剣櫓踊り」、樽の上では女形の華麗な「采振り踊り」、ともに鮮やかな錦絵のようです。花笠の子ども達のお囃子、漕ぎ手、歌い手を含め、時代絵巻を見ているようでした。松江新大橋下流左岸の特設席で間近に見物することができ感動しました。

神事は前回までは12年ごとでしたが、今回から10年に一度に短縮され（聞くとところによると10年だったり12年だったりしたこともあったとのこと）、小学4年生の時に耳にしたと思われる「ホーランエンヤ・ヨイヤサノサッサ」の掛け声が自然とでできます。松江は私の故郷だと実感しました。十年後には「還御祭」を陸船行列まで見物したいと思っています。

二十代半ばまでいた旧松江市南部の光景は、帰省の度に田畑や山の緑が少なくなり、「この道はどこへ？」と変化していますが、一方では国宝松江城天守や松平直政公以来継承されている伝統行事があり、目先の変化はごく一部だと思いました。宍道湖に浮かぶ嫁ヶ島、夕日も半世紀前と変わらない存在だと感じています。帰省の機会も少なくなりましたが「ふるさと」が「まっちゃん」であることを誇りに思うこのごろです。

◇令和2年（2020年）9月号

のづ
野津 ゆう子



黒田町生まれ。
法吉小、一中、
松江市立女子高卒。
（株）アコード勤務。松江
市立女子高皆美が丘 前
市立女子高関西支部理事。
奈良市在住。

関西に来て、もう半世紀が過ぎました。最初に住んだのは甲子園球場から道一つ隔てた所でした。そのころ甲子園球場は試合が7回に入ると外野席にただで入れたので、歓声が聞こえて来たら走って観に行っただけでした。阪神タイガースが勝った時は知らない人と一緒になって六甲おろしを歌いました。

今、住んでいるのは奈良ですが、落ち着いていて松江と似ているような気がします。コロナ禍の自粛時に奈良公園まで散歩に行くと、数十頭の鹿がひとかたまりになって草を食べていました。観光客が減って煎餅を食べないからか、腸の調子が良くなり、かの有名な鹿のフンも元に戻ったそうです。東大寺の南大門、大仏殿、大仏様でも人が映りこまない写真が撮れました。今年は夏越（なごし）の祓、年越の祓に行きたいと思っています。

私が育った黒田町では、何年かに一回、家に年神様が回ってこられました。太鼓がにぎやかに鳴れば鳴るほど神様が喜んでくださるといって近所の子どもが集まってたたいたこと、正月には海の幸、陸の幸、山の幸を飾り、ひな祭りには雛あられ、花餅を作ったことを思い出します。雛あられは正月飾りの力餅を干し米にしたものと餅花、黒豆で作りました。花餅は団子の粉を練って赤色、黄色、緑色の食紅で飾り、亀、鶴、海老、椿などの片手で乗る可愛い型に入れて蒸し、椿の葉の上のせてお供えをしました。

宍道湖といえば、夏休みに自転車で阿羅波比

神社の所に行ってシジミ採りをしたことを思い出します。そのころは結構大きいシジミが採れました。また、父と船で水門をくぐって投網打ちをしたことも覚えています。小魚に混じってコイ、フナ、スズキが採れました。その頃は船の上から泳いでいるのが見えるくらい水が澄んでいました。船の上から見たあかね色に染まった空に沈む夕日がとてもきれいだったことは今でも忘れられません。

◇令和3年（2021年）1月号

こいずみ かつよし
小泉 勝是



1944年 松江市石橋町生まれ、北堀小、松江一中、松江高（現・北高）から転校して山口高卒、広島大理学部卒、三菱電機、三菱電機情報ネットワーク、インダサイネージ。
京都府・長岡京市在住

父親の転勤のため高1で松江を離れて半世紀以上が経ちましたが、関西に住んでいても私は生粋の松江っ子だと今も自負しています。

70歳を過ぎた今は、シニア大学の仲間と子どもたちに科学やおもちゃ作りを教えるボランティア活動に励んでいます。活動の傍ら、水彩画を描いたり、松江の観光PRをしたり、近畿での松江会や北高同窓会（双松会）の行事に参加したりで充実の日々を過ごしています。

ボランティア活動に結びついたきっかけは、私の水彩画を見た北高出身の人が私を先輩と知ったという偶然の出会いからでした。この出会いが、ボランティア活動を学ぶ場（シニア大学）につながり、またすっかり“ご縁”が薄れていた私を松江に引き戻してくれたと今も感謝でいっぱいです。以来、近畿松江会や近畿双松会に入会し、同郷の人たちとの懇親を深めたり、観光大使を引き受けたりしています。

観光大使をやるからにはと、改めて松江城、

菅田庵、ヘルン旧居、月照寺、八重垣神社などの市内巡りをしました。月照寺では大亀の石像に再会し、祖母と訪れたことを思い出した大きな感動でしたが、残念だったのは、京店や天神町のにぎわいが失せてしまったことでした。今後松江を更に盛り上げる何らかの産業が必要だと思いながらの市内巡りでした。

松江との縁が復活して以来、展覧会に松江の風景を描いて出展しています。これは少しでも松江に関心をもってもらおうという“仕掛け”で、昨年はホーランエンヤを描いたところ、松江の歴史、お薦め場所、宍道湖七珍、お菓子、温泉、どう行列などの話題で大いに盛り上がりました。

今年はコロナで思いを果たせずでしたが、来年は今年のも含めて松江のお役に立てるように頑張りたいと思っております。

◇令和3年（2021年）5月号

かげやま かつお
景山 克雄



1963年松江市米子町生まれ。母衣小、松江一中、国立米子高専建築学科卒。
西松建設（株）勤務。
大阪府八尾市在住。

小学生、中学生時代にそれぞれ一回ずつ市内で引っ越し、学区を変わりながらも松江に住んでいましたが、中学校を卒業し、進学のため近隣の米子市で寮生活を始めるのを機に松江を離れてから43年になりました。すでに両親は他界し、兄弟もいないので松江に帰る機会が少なくなりましたが、帰った時にはまちの変化にいつも驚かされています。

60歳を目前にし、定年後に松江に帰ろうかと考えてはみたものの、妻に相談をしたところ「帰るなら単身でね」の一言でくじけてしまい、30年近く住んでいる第二の故郷となる関西で残りの人生を過ごそうと考える今日このごろ

です。

高専を卒業し 20 歳で入社した今の会社で定年を迎えると、40 年間一社一筋となります。

大工だった父の影響で工業系の学校へ行き、今勤めている建設業の会社に入って数々の建物の新築工事や見積もり、営繕を担当してきました。仕事柄、建物には興味があり、寺社仏閣や古いまち並みを趣味のマラソンで走りながら見て回っています。

松江にも小学生時代に遊び場だった松江城をはじめ、北田町にある普門院や八雲町の熊野大社など好きな建物がたくさんあります。時代と共にまち並みは変わっていても、これらの建物は昔ながらの姿で、私を含め松江を訪れる人たちにいろいろな思い出を与えてくれていることと思います。

コロナ禍でなかなか帰省できない状況ですが、この寄稿が掲載されるころには収束していることを願っています。

帰省して新たな松江を発見しつつ、昔ながらの情緒あふれるふるさとにまた触れられることを願っています。

コロナが収束したらすぐにでも松江に行きたいな。

◇令和 3 年 (2021 年) 9 月号

みさわ ただし
三澤 正



1948 年 奥出雲町生まれ
松江工業高校建築科卒。
近畿松江工窓会 会長
(松江工業高校卒業生会
近畿支部)
島根県人会・遣島使
(有) 三和建築事務所・
一級建築士
大阪府四條畷市在住
生涯現役・PPK!

建築家に憧れて都会の松江工業高校へ入学したが、ほどなく事情により定時制課程(夜間

部)に転入した。15 歳の心のギアを入れ直した。昼は屋根瓦工事会社勤務、夜は学校の生活のスタート。休日は松江大橋の下から手漕ぎボートで嫁が島巡り〜。松江城もよく行った。

職場では『仁多のヤマザル』の愛称で、仕事の最中でも屋根の上で『そろそろ学校だけんもうエネや!』とかわいがられ、学校では年配の同級生に『オイ寝ちゃ〜あいケンぞ!』とかわいがられ、下宿先では『その下着洗っちゃいたけんネ』とかわいがられ、ありがたき幸せな松江の学生生活だった。

夜、授業後の帰り道、古志原から下宿先の大庭町への上り坂、自転車を止めて見上げた満天の星空、ハ〜なんときれいやった事か!こちらで夜空を見上げる度に当時の情景が重なってくる。

多感な年頃の 4 年間で濃密に育ててもらった松江を後にして・・・卒業後は大阪でまだまだ研鑽中ですが、建築設計事務所をしています。仕事上で数々の大震災被害を体験しました。そのたびに『生命・健康・財産』を守る役割の重要性を感じています。微力ながら肝に銘じて生涯現役で励んでいきます。

ふるさと関係では松江工業高校卒業生会近畿支部長と、県人会の遣島使をしています。近畿松江会の方と交流の中で、松江市内の各高校卒業生会の交流をもっと深めていきたいとの提案がありました。そして、昨年近畿松江会の情報網に当校の情報も載せていただける事になりました。松江会の輪がますます広がる事を願います。私は松江市生まれではありませんが、この機会に入会させていただきました。どうぞよろしくお願い致します。

島根には毎年 4~5 回帰っています。これからも故郷島根を愛し、松江の美しさをアピールしたい。松江の皆さん、だんだん。

◇令和4年(2022年)1月号

よねだ としひろ
米田 稔宏



松江市白潟本町、1947年8月生。白潟小、松江三中、松江商業高校。1966年住友銀行(現三井住友銀行)入行、2001年退職。現在(株)パソナマスターズ。ふるさと応援隊 顧問他、振商会近畿支部支部長

私の実家は松江を南北につなぐ大橋の南詰です。目の前が大橋川でまさに宍道湖への河口になるところで生まれ育ちました。幼少の頃には河口のボート小屋でヤゴを取ったりフナやゴズ、エビ、釣り竿の糸を湖面に張り、群れをなしてくるサヨリを瞬間に跳ね上げて取ったりしました。時にはボートを漕いで嫁ヶ島まで行き、大きな蜘蛛と遭遇しびっくりした懐かしい思い出もあり、本当に宍道湖は私の遊び場でした。

そしていつの頃からか一日の終わりの落日に魅了され、決まったように宍道湖の夕日を見に湖岸を散歩したものです。千変万化、刻々と変わる四季を通じての映像に浸るのは、私の楽しみであり心に残る宝物でした。

私が育った昭和22年から30年代は商店街も大変賑やかで「土曜夜市」や「天神祭り」、大橋の建設で犠牲になった足軽源助や深田技師の供養として、私の祖父が力を注いだ「源助祭り」など本当に活気がありました。我々団塊の世代を中心として一つの町内で野球チームができるほど、子どももたくさんいました。野球に明け暮れたのは言うまでもありません。

銀行を卒業してから企業の新規事業立ち上げや立て直しなど、いろいろな仕事に携わりました。その中で松江の観光振興に接する機会があり、観光に対して真に地道にしっかりと取り組んでおられることがよく分かりました。松江

には長い歴史と文化に裏打ちされた豊かさがあります。そういった意味でも長年「湖都松江」を編集され、また作家を招いての講演や、作家の松江の感想を本にまとめるなど、実に民度の高い観光文化をプロデュースされてこられたことに深く敬意を表します。

私の関西を中心とした生活も半世紀を超しましたが、我が「ふるさと松江」の発展と皆様のご健康、ご多幸を祈りつつこれからも関係人口の一人として松江を応援したいと思います。

■松江文化情報誌『湖都松江』の紹介



vol. 43の特集は

●松江で未来を拓く

Ruby City MATSUE 松江に集うIT企業

●佐陀神能 ●松浦正敬前市長のメッセージ

発刊の目的

古き良き松江の歴史に目を注ぎ、さらには現代松江の良さを見つけ出すことで、湖都松江の進むべき方向や課題、百年を見通す未来を考える。

(年二回発刊、本体400円+税、定期購読可)

(お問い合わせ)

〒690-8540 松江市末次町8-6

松江市観光文化課内 松江市文化協会

Tel : 0852-26-1157

Fax : 0852-55-5634

E-mail: bunka@web-sanin.co.jp